

# 麻耶雄嵩

ALSO SPRACH MERCATOR.  
YUTAKA MAYA

# 五 品 り き

# かく

# メル カル



講談社  
文庫



講談社文庫

# メルカトルかく語りき

麻耶雄嵩

講談社

【著者】麻耶雄嵩 1969年三重県生まれ。京都大学工学部卒業。大学では推理小説研究会に所属。在学中の'91年、島田荘司、綾辻行人、法月綸太郎各氏の推薦を受け、『翼ある闇 メルカトル鮎最後の事件』でデビュー。2011年『隻眼の少女』で第64回日本推理作家協会賞長編及び連作短編集部門、第11回本格ミステリ大賞をダブル受賞。同書は『2011本格ミステリ・ベスト10』国内ランキングでも1位を獲得。主な著書には『夏と冬の奏鳴曲』『木製の王子』『神様ゲーム』『貴族探偵』などがある。

メルカトルかく語りき

まや ゆたか  
麻耶雄嵩

© Yutaka Maya 2014

2014年5月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに  
表示してあります

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——凸版印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277793-3

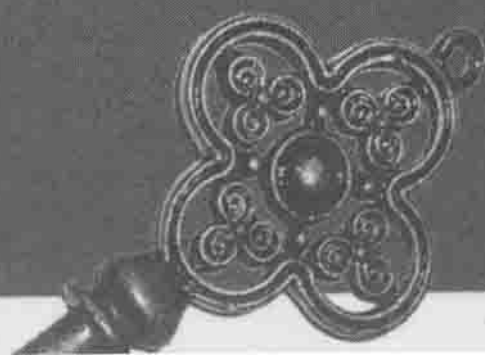
死人を起こす 7



九州旅行 87



収束 137



C O N T E N T S

ALSO SPRACH MERCATOR.

答えのない絵本 215

密室荘 301

あとがき 332

解説 円居挽 334





講談社文庫

# メルカトルかく語りき

麻耶雄嵩

講談社





# ALSO SPRACH MERCATOR.

YUTAKA MAYA

ILLUSTRATION  
YASUSHI SUZUKI

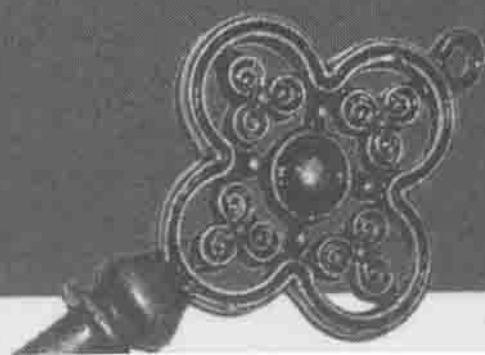
死人を起こす 7



九州旅行 87



収束 137



C O N T E N T S

ALSO SPRACH MERCATOR.

# 答えのない絵本 215

## 密室荘 301

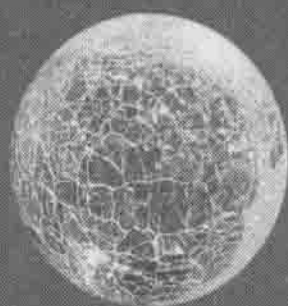
あとがき 332

解説 円居挽 334





ALSO BY WILLIAM MERCATOR.



死人を起こす



## I

## 1

一年前のことだ。僕がまだ高三の夏。

「面白い物件があるんだ」

遊び仲間の長谷友幸<sup>はせともゆき</sup>が、一枚の写真を見せてきた。そこには奇妙な形をした建物が写っていた。二階建てなのだが、一階が洋風のレンガ造りで、二階が古い日本の民家のような木造建築だった。大きさは普通の家くらい。

「なんだ、これ？ オカルトハウスか何かなのか？」

隣の新井敬二<sup>にいけいじ</sup>がニキビだらけの顔で、写真をまじまじと見つめている。

「別に怪しい物件じゃないさ。住んでたひとが日本文化好きのドイツ人らしい」

長谷の父親は不動産会社を経営していて、時たま面白そうな物件があると、こうやって見せてくれる。

「それなら全部和風にすればいいのに。どこで間違つてこうなったんだ？」

「別荘じゃなく、ずっと住むところだから一階は住み慣れた洋風にしたらしい。今まで椅子で生活してた人間がいきなり畳で布団というのも大変だろうしさ」

「それにしても中途半端だよ。せめて外見だけでも統一すればいいのに。いくら日本好きっていつても、外国人の感覚じゃあこの程度なのか」

新井はまだぼやいている。まあ、新井のぼやきは癖みたいなもので、誰も気にはしていないが。

「ドイツ人つてのは融通が利かないっていうしさ。まあ、インド人から見たら日本のカレーライスも同じようなものだろ。……なあ夏休みにみんなでここに泊まりに行かないか？」

そう長谷が僕たちに誘いかけてきた。いままでも面白そうな物件があると、父親公認で何度か覗きに行っていたのだが、泊まり込みは初めてだった。長谷曰く、場所が遠くて日帰りでは難しいのと、秋からは受験勉強が本格化するのでその前にみんなではーっと遊びたいとのこと。

「生野いくのやあげはたちにも声をかけとくからさ」

もちろん僕に異論はなく、八月の末に、二泊三日でその家（先ほどの長谷の説明に妙な説得力があつたので、以後カレー荘と呼ばれるようになった）に行くことになった。

集まつたのは六人。僕らの他に生野武雄たけお、青倉あげはあおくら、寺前桃子てらまえももこ。みな同じ高校の仲間で、キャンプや海水浴などにつるんで行くことが多かった。ほとんどが小学校や中学校からのつきあいだったが、生野だけは高校で知り合つた仲だった。

小さな町の高校で、生徒のほとんどが地元の五つの中学校から来ていた。そのため中学時代そのままのグループになることが多かったのだが、生野は父親の転勤とともにここに進学した新参者だったため、他に知り合いはいなかった。中学までは東京に住んでいたらしい。

そんな生野が僕らのグループに入つた経緯は、単純明快、あげはが彼を気に入つたからだつた。

あげはは色白の美人で、性格もよく、僕らのマドンナ的存在だった。いや、僕らの間だけではなく、学年でも一、二を争う美人だった。艶つややかな長髪が印象的なこともあつて、黒アゲハと渾名あだなされたりしていた（本人も多少は意識しているのか、携帯に

黒アゲハのストラップをつけていたりする。あげはと仲が良いということだけで、自慢に思えてしまう、そんな女の子だった。云い寄る男も数知れず、僕が聞いているだけでも十人以上に告白されていた。ただ本人は大人しいというかいたって内気な性格なので、ことごとく断っていたらしいが。

そんなあげはが初めて自分からアプローチをしたのだ。といつても、自分ではできず、友達の桃子を介してだったが。桃子の方は、口は悪いし手は早い、さばけた性格で男子とのスキンシップなんか屁とも思っていない、僕らにとつてはほとんど男友達同然で対照的だった。桃子が気さくに生野に話しかけ、桃子の背後であげはが反応を窺うかがっている。そんな感じだった。

そして生野はいつの間にか僕らのグループの仲間入りをしていた。結局、あげはというより、桃子が仲間に取り入れたようなものだが……。長谷や新井も実はあげはに気があったので、生野の登場はとんびに油揚げをかつさらわれる気持ちだっただろう。なぜ僕に彼らのことが解ったかと云えば、僕もあげはのことが好きだったからだ。

生野は背が高くしゅつとした顔立ちで、何より垢抜けていた。やつぱり都会者の方がモテるのかと、地元で就職した親を恨んだこともある。ただ生野自身が面白い